

嗚呼！芹澤先生

天理大学名誉教授
佐藤 浩司 Koji Sato

本年（2018年）3月26日、芹澤茂先生がお出直しになりました。ご家族ならびにご親戚の皆様、殊に秀子奥さま、ご息女、ご子息にとって悲しみも一入のことと、謹んでお悔やみ申し上げます。私も悲しい。

先生は、大正10年（1921）12月3日のお生まれです。数え年で享年98歳でした。お父上常晴様、お母上はる様に、男10人女2人の12人のお子様があり、先生は、末っ子の十男として静岡でお生まれになりました。地元の学校から長じて第一高等学校、東京帝国大学文学部志那哲学科に進まれ、半年くらいで学徒出陣のため入営されたのです。戦後、やむなく京都大学文学部に進まれ、西洋古典文学を専攻され、昭和24年に卒業されました。後、天理教校本科に学び、昭和25年より付置研究所である宗教文化研究所（現、おやさと研究所）に入職、天理大学では、昭和29年に兼任の講師、同37年に助教授、46年には教授となりました。おやさと研究所の改組により、昭和47年天理大学文学部の所属となり、同54年から2年間文学部長をお務めになりました。昭和57年定年退職となりましたが、再採用となり、同60年から再びおやさと研究所の兼務となり、高齢の主任であった丸川仁夫先生を補佐する意味もあったので副主任を務められました。平成8年より14年まで、研究所の嘱託（大学では非常勤講師）をお務めになり、平成13年には、名誉教授となっています。

私が大学に入学した2回生の時、先生の「世界宗教史概説」の講義を受講いたしました。まず、最初の講義で驚かされたのは、大教室のそれは今のサイズとは比較にならない大きな黒板一面に、日本が極東に位置するメルカトルの世界地図をお描きになったことです。しかも正確に。講義は、世界宗教とは何か、宗教史とは、宗教の成立要素（基盤、機能、組織）に始まり、各論として石器時代の宗教、古代オリエントとその宗教、エジプトの宗教、イランの宗教、ギリシャの宗教と進み、それぞれの地域の正確な地図と、時の経過を編年的に表した図表を添えて、目で見て分かるように事細かに教えてくださいました。殊に、古代オリエントの宗教は、2年に一度、「世界宗教史特殊講義」でお出でになっておられた三笠宮崇仁親王殿下の特講の前に概説して頂いたお陰で容易に理解することができました。先生には、京都大学で田中美知太郎先生の下で、西洋古典語のギリシャ語を学ばれ、田中美知太郎・松平千秋著の『ギリシャ語入門』（岩波全書、1951年）で、「語彙索引」と「変化表」を担当しております。その後先生は、メソポタミア文明で使用されていた古代文字の楔形文字（cuneiform、くさびがたもじ、せっけいもじ、けっけいもじ）であるシュメール語に興味を持たれ、「シュメール語宗教文書の種類」（『オリエント』11巻3～4号、1968年）や「各種の宗教儀礼<メソポタミア>」（前嶋信次[ほか]編『古代文明の発展（オリエント史講座第2巻）』学生社、1985年）に結実しています。シュメール語の解説には、晩年まで興味を持ち続けておられたようです。

私が学生の時には、「おふでさき概説」は田中喜久男先生が、「おふでさき特殊講義」は上田嘉成先生が担当されておりました。

たので、芹澤先生は、世界宗教史の先生という認識でした。ところが、天理教校本科に進ませて頂きますと、芹澤先生には「おふでさき研究」を担当されておりました。講義は、斬新で刺激的、新しい知識の宝庫でした。毎回の2時間の講義中に、万年筆のスペアを一度は取り替える程でした。ここで少し先生の「おふでさき」研究を振り返ってみたいと思います。

「おふでさき」は、昭和3年に公刊されて以来、教義の原典、信仰の基準として親しく拝読され、研究もされてきました。なかでも、中山正善二代真柱の「おふでさき」にこめられた思いは並大抵ではなく、今も尚その業績は、光輝いています。「第一号の初めの御歌から、第十七号の最後の御歌に至る迄の一七一一首の御歌の順序というものは、果たして偶然に並べられたにすぎなかったものであろうかということが問題となるのではないかと。私はむしろこの間に、一つの教理体系というのが必ず在るという気持がしている」（『おふでさき概説』天理教道友社、昭和40年、35頁）と、「おふでさき」に教理の体系があることを予想されています。『「神」「月日」及び「をや」について』（養徳社、昭和10年）は、「おふでさき」に通底する順序を示されたものとして知られておりますが、「（おふでさき十七号の）号を追ふて、体系的に編述させたものでなく、機にのぞみ、事態に則して記録されたものである。勿論、大観して、神、月日、をやを使ひわけられたが如き、体系的順序はあるも、同じことについて前後数号に、散々と記されてあるものも多い。」（『続ひとことはなし』天理教道友社、昭和26年、95～96頁）と述べられており、残念ながらその後のご著作には、いかなる体系があるかをお書き頂いておりません。先生は、この前人未踏ともいべき体系に取り組み、金字塔を建てられたのです。

先生は、「おふでさき」の読書法として「どこに何が書かれているかをよく知って、その議論の仕方、すなわち話の糸口や本論となる話題がどんな順序に出ているか、などを調べることになる。話題の中の中心的主題は、全体の中にたくさんあっても、これが一つの組織だった話の中に位置付けて理解できれば、何が書いてあるかは了解されたことになる。このような読み方ができるのは、「おふでさき」は本文が組織的に書かれていて、これを理解する手掛かりが『お道』（天理教の教理と歴史）の中にあるからである。」（『おふでさき通訳』天理教道友社、昭和56年、691頁）との確信から、「おふでさき」の教理体系を、「おふでさき」自身の体系という意味に解釈して、これの論証を行ってきたのです。

先生は、まず「ひながたの倫理」（『天理教学研究』第6～7号、昭和27～28年）において、『おふでさき』に表れた親神の意思を現実の人間生活の上に実践しようとして通られたのが、教祖であった」（第6号、63頁）との理解から、「おふでさき」によって「ひながた」を論じ、体系化を試みたものです。「解釈について」（『天理教学研究』第10号、昭和30年）は、二代真柱の昭和28年度本科の講義に触発されたもので（これは、後に『おふでさきに現れた親心』天理教道友社、昭和30年として刊行）、副題の「おふでさき文法序説